



西域から降る雨



ねむ

これほど不甲斐なくなってしまうというのに、李璐はまるで甘ったれも自嘲もせず、どころか追いつめられて今にも命がなくなるような、そんな顔をして、部屋の真ん中に大の字になっていた。

服は身につけておらず、かろうじて下着がその体にひっついている程度で、僕はその光景に当惑し、しかし李璐の表情の険しさに、そういうこともいってられなくて、あわてて身近にあったシャツをその体にかける。李璐がなにかつぶやいて、僕はとっさに日本語で、

「なに、聞こえない」

という。今度は李璐が僕に、なにをいってるかわからない、中国語で、と中国語で言い返す。

だから僕は、今度は中国語で、どうしたの、と問うた。

『わからない』

『なんで服を着てないんだ。なにがあった』

『なにも』

なにも。

李璐は怪我をしていない。体の具合が悪いというわけではないらしい。

ただなにかに責め立てられている気がしているらしい。

李璐の日本人の僕より少ない語彙の中に、そんな感情をあらわすだけの言葉がないのを僕は知っている。

彼女はろくな教育も受けず、中国の奥地で物売りをしていた。

話す言葉は方言混じりで読み書きもおぼつかない彼女が、初めて僕に会った時、唯一知っていた日本語は、

「サヨナラ」

今会ったばかりだということにそんなことを言われて、僕は面食らい、苦笑し、そんなことをにこにこと言えるその日に焼けて乾燥した顔を見つめた。美人でもないけれど、かわいらしい様子をしていた。

僕のいた宿舎の近くで果物を売っていた李璐。親しくなるのはあっという間だった。

その無教養さに時々あきれれることはあったけれど、李璐は僕が言って聞かせればちゃんと言うことを理解して善処したし、そもそも気立てはいいので、明るく気前もよく世話好きな彼女に、僕はどんどん惹かれた。

そうして李璐と離れたくないなあと思い始めた頃、僕の会社が、日本に帰って来いといっ
てきて、だから僕は李璐に結婚を申し込んだ。僕と一緒に日本に来てと。

李璐は二つ返事だった。

それは僕の言うことを理解しているのか不安になるほどだった。

しかし彼女の両親はものすごい喜びようだったし、結婚式には把握しきれないほどの人が
来て僕と李璐を祝ってくれた。そのあとすぐに日本に旅立ったのだけれど、李璐はこちらが
心配になるほど不安がりも淋しがりもしなかった。

李璐はいい奥さんだった。

料理もできたし、日本製の便利で高性能な家電にもおもちゃに飛びつくみたいにしてすぐ
に使い方を覚え、また、使い。日本語は相変わらず少ししかしゃべれなかったけれど、それ
でも友達もちらほらできたみたいで、楽しげではあった。

だからいいのだと思っていた。

『ねえ、知ってる？』

僕の胸にもたれかかりながら、表情とはとても結びつかないやさしい声で、李璐がポツリ
と呟いた。

『私、もうすぐ狂う』

『まさか』

李璐は馬鹿だ。馬鹿だからすぐそんなことを言う。

なのになんで僕は、笑い飛ばせもせず、李璐をきつく抱きしめてしまうのか。

『さっき、もう少しで狂うところだった』

『もう言うな』

ますます笑えなくなっていく僕は、李璐のすっかりつやつやとしたやわらかな頬をなで。

潤っては生きていけないとでもいうかのような李璐の体を床に組み敷いた。

柔らかい殻

もうすぐ自分は狂うと李璐は言ったけれど、今のところその様子は見られず、相変わらず料理を作ったり掃除をしたり洗濯をしたり、時々故郷の歌をか細い声で歌ったりしていたけれど、それは全く以前の李璐だったので、一体僕は李璐がどうして狂うなんて言い出したのか、そして、どうして僕があれほどあの時の李璐に動揺させられたのかを、考えることもなく忘れてしまおうとしていた。いや、思い出そうとすると、まるで自分が死ぬということを考えた時のような、思うだけで体も心も腐って凍って粉々になりそうな恐怖が襲いかかるので、僕はその疑問の尻尾にすら手を伸ばせないままにいる。自分を臆病だと思う以前に、そんなことを故意に悩むのは愚かなんだと言い聞かせて逃げる。いや、逃げているという自覚さえも自分に与えないように、僕は細心の注意を払った。そしてそれはなかなかうまくいっているのだと思う。

「コーチ」

李璐が僕を呼ぶ声に、僕はぼんやりと長い間磨いていたらしい木のテーブルからやっと顔を上げた。まんべんなく全体を磨いたならまだしも、一箇所だけ台拭きを何往復もさせていたそこだけがぴかぴかと光って、それが李璐を笑わせる。夫の日本名を、まだうまく発音できない大陸生まれの僕の妻。本人はちゃんと「広一」と呼んでいるつもりなのだろうが、それはどう聞いても「コーチ」で、僕はまるで李璐になにかを教えているかのような気になる。しかし確かに僕は李璐の先生であるには違いない。李璐のとてもゆっくりとした日本語学習につきあうのはとても骨が折れるのだけれど、真面目で素直である李璐が一つ一つの言葉を吸収していくのを見るのは、教えるものとしてはなかなか楽しいことであつたし、李璐が覚えてたの単語を得々として、でもしかし間違いもおかしながら日本人の友人らにしゃべっているのは、どこかほほえましくさえあつた。

「ゴハンマスヨー」

「です、だよ」

「喔、是的是的。ゴハンデスヨ、コーチ」

「はいはい」

李璐は少しずつ、日本の料理も作れるようになった。友達の中に料理が得意な人がいて、彼女に教わっているらしい。日本の火力の弱いガスコンロは中華にはあまり向かないけれど、あれこれと手を加える必要があったりじっくり火を通すことが求められる日本料理にはぴったりで、もともと料理の心得がある李璐はこれもまた難無くこなす。これは僕に教えるだけの技量も知識もないので、その李璐に料理を教えてくれているという人には、本当に感謝していた。その上、全然中国語のできないその人に、たどたどしいながらも日本語で教えてもらっているため、李璐は彼女に会ってから大分日本語が上達したように思う。

「オイシーネー」

「ああ、いいにおいだね」

まだどこかずれている李璐と言葉を交わしながら、僕は箸を取った。

今日の夕食は完全に和食ばかりだった。

干しガレイを焼いて、それに大根おろしを添え、それにほうれん草の胡麻和えと南瓜の煮物がつく。ご飯と味噌汁もきっちりついていて、完璧だ。

味は、僕の母が作っていたのとは少し違うようだったけれど、でもとてもおいしかった。

ほめると李璐はニコニコして、オイシーデスネーヨカッター、と繰り返す。李璐はこのごろ、あまり中国語を話さないよう努力するようになったのだけれど、話せる言葉がまだ少ないので同じ言葉を何度も言う。そういうふうにして李璐は言葉の一つ一つを体にしみこませているのだと気づいたのはつい最近。

李璐の体を、日本語と日本料理と、そして僕だけで満たせてしまいたい。

僕はいつもそう思っているけれど、それを面と向かって李璐に言ったことは、一度だってない。

カレイ、ダイコンオロシ、と目の前の料理の名を繰り返し口の中で転がす李璐を見つめながら、李璐を狂気へと導いているのは、僕なのかもしれないとぼんやり思った。

雨垂れ

あなたが私に雨のように降らせる言葉のなにひとつとして、私には理解することができない。

中国人の私などよりよほど美しい、正しい発音で中国語を話すあなた。

私の回りに、こんな言葉で話す人は今までいなかった。

あなたは喋り続ける。

語り続ける。

言葉を。

声を。

音。

貧しい農村の家を思い出した。

大粒の雨が容赦なく私たちの小さく頼りない家を打つ。

私たちはいつこの家が雨に流されてしまうのかと怯えながら、一刻もはやく雨が止むようにと祈った。誰にともなく祈った。祈る以外、私たちにはなかった。

広一の言葉はその雨よりずっと優しい。

私を怯えさせない。柔らかい声、温かい感情。

だけど。

広一が私に雨のように降らせる言葉のなにひとつとして、私には理解することができないのだ。

私を濡らした雨水が、髪の前から、顎の前から、指先から、ぼたりぼたりと床にしみを作る。私にはそれを目で追うことだけしか出来ない。

「李璐」

今はもう、彼が私を呼ぶのさえ、わからなくなりかけているのだ。

END